

シンポジウム特集

渋沢栄一から見る「幕臣たちの文明開化」

井上 潤

① はじめに

「幕臣たちの文明開化」というテーマで語るにあたり、渋沢栄一の名前があがることに違和感を感じる方が多いのではないだろうか。渋沢栄一というと、明治以降に実業界を中心に民間主導で日本の近代化に尽力した人物と強く認識されていると思うからである。ただ、実際の渋沢は、一時期幕臣、明治政府の一員として過ごしているのである。本稿では、その一端を紹介し、渋沢が日本の「文明開化」にどのように関与したのかを探ってみたい。

② 今一度、渋沢栄一とは

日本の近代社会を創造した人物、組織化した人物として称せられる渋沢栄一（1840-1931）について、今一度簡単に紹介してみよう。

渋沢栄一は1840（天保11）年、厳格で経営手腕、村のまとめ役等に長けた父親と、とても慈悲深い母親のDNAを受け継いで、武蔵国榛沢郡血洗島村（現埼玉県深谷市血洗島）に生まれた。

血洗島村は、江戸時代に税を米で納めることが通常であった中、早くから金銭で納めるシステムが取られていた。また、農村地域であったが、安定した耕地が多く得られないところでもあったので、純粹に農作だけで生活が成り立つようなところではなく、商工業活動などをしていかないと生活が成り立たないということもあり、貨幣経済が早くから浸透している地域であったといえる。

この地域では、藍の葉を買い集め、加工し、藍玉という染料を信州や上州などへ売りに行く商売が非常に盛んに行われており、この商売は換金性が高く、経営をうまく軌道にのせた家は富裕層へと成長していた。

渋沢家も栄一の父親の代に本格的に藍玉の商売を始めるようになり、これによって大きな財をなし、村で一、二を競う富農層に成長した。渋沢も家業を手伝う中で、経済・経営のノウハウを身に付けていった。彼の経済観は、決して経済書を読んで、理論の習得から得たものではなく、あくまでも実践を通してのものだったのである。

一方、渋沢は、漢学者である従兄・尾高惇忠から本格的に読書を授けられ、学問・教養を身につけていく。尾高の読書法は、当時としては一風変わっていて、興味・関心のある書物を出来るだけ多く読ませた。後に渋沢は、人生の岐路に立った時に自ら選ぶ道を、出来るだけ多くの情報を集め、咀嚼して、そこから自分の進むべき道として導き出しているところがある。それ故、大きく道がそれることなく、多くの事績を残し生涯を全うすることが出来た。その原点が、尾高の幅広い読書法にあったのだと思われる。

学問好きだった渋沢は、数多くの書物に触れ、また、江戸に遊学などして思想家たちとの交流を重ねていくうちに、幕末の世の中に蔓延していた攘夷の思想に傾いていくのであった。た

だ、攘夷思想の多くが精神的・政治的思想から論じられる中、栄一の攘夷思想は、経済的側面からのものであった。

また、渋沢は、攘夷の考えだけでなく、士農工商に代表される官尊民卑の弊習を何とか打ち破らなければ、より良い世の中を目指せないという幕政への批判も募らせていく。

これら当時の世の中の不条理を排除することを目指し、近隣のそして江戸で知り合った同士を募り、一つの計画を立てた。1863（文久3）年の冬至の日、高崎城を乗っ取り、横浜の外国人居留地を焼き討ちしようというものであった。

渋沢は、貴重な戦力として、坂下門外の変に参画したとして嫌疑をかけられ、京都に一時期身を隠していた従兄・長七郎を呼び寄せる。その長七郎が、いよいよ実行に移す直前に集まった密談の際に、「京都でいくつも見てきた攘夷決行によって国が攘夷の意を表すように変化しているとは思えない。単に行動を起こしただけで『無駄死に』に終わっていないか」という疑問を發したのであった。

血気盛んな若者たちが集って、もう引き下がれないという気持ちが非常に強まった中で、渋沢はその言葉を冷静に汲み取り、みんなを諭し、体制内に残って長く生きながらえて、世の中を変化させていこうと説得し、その暴挙を中止にってしまった。ここでも、情報をきちんと斟酌し、大きな選択を導き出している。

攘夷決行を中止した渋沢は、その後仕えていた一橋家の当主慶喜が將軍職に就くにあわせて幕臣となり、幕臣時代のほとんどをヨーロッパで過ごす。元来、攘夷を唱えていた者の渡欧は考えられないところだが、体制の中に残り、世の中を変えたいと思った渋沢は、既に思想の転換がはかられ、より積極的に西洋文明に接しようとしていたのであった。ちょうどそのような時、1867（慶応3）年のパリ万国博覧会に派遣される幕府使節団に庶務・經理係として参加し、ヨーロッパという「新世界」に出会うことになったのである。

官尊民卑の打破を標ぼうする渋沢であったが、1869（明治2）年11月に民部省租税正として出仕し、1873（明治6）年まで民部省、大蔵省に籍を置いた。本人は、役人になるつもりは全くなかったが、新しい国づくりに参画できるというところには非常に意義を感じ、挑んでいったのである。

新しい国づくりのために集った精鋭たちと共に、自分たちが何をするのかを決め、それについて調査研究し、政策立案する「かいせいがかかり改正掛」が組織され、渋沢はその掛長に就任することになる。改正掛は近代化を実現するため、省庁を横断的な形で設けられた今でいうシンクタンクのような部局であった。

その後、国家予算のあり方について考えが対立し、上司の井上馨と共に大蔵省を辞めることになる。それ以降は、自分が本旨とした民間の立場での活動がはじまる。

民間での活動で最初に手がけたのは、日本初の近代的な銀行・第一国立銀行であった。「国立」とあるが、れっきとした私立の株式会社である。渋沢は、まず経済・金融の基盤を作り、その後、あらゆる分野の企業を株式会社として普及させていかなければいけないと奔走したのであった。

ただ、新たに株式会社を立ち上げ、その経営を軌道にのせるのは決して容易な話ではなかった。例えば、第一国立銀行は、発足後一年足らずで経営の核となる出資者・小野組と島田組が破綻し、経営危機をむかえたり、日本初の本格的製造業・王子製紙は、商品として売れるような紙ができないという技術上の問題を克服できず、利益が出るまでに数年かかっていたりしている。その間、渋沢は平身低頭、出資者への説明に奔走した。しかし、株主達は、栄一の誠実さと信念を信じ、長期の無配に耐え、損失補填の為の増資にも応じたのであった。

また、渋沢は、新しく会社を興そうとする人たちに、銀行からの融資の受け方や財務諸表の作り方などを指導したり、発起人として名を連ね、開業のための資金の一部を自ら投資したりして支援した。このような渋沢の誠意ある、ねばり強い努力の結果、株式会社に対しての信用が得られ、明治20年代から30年代にかけて、一気に花開くように株式会社が普及したのであった。

渋沢も金融関係から製造業、陸運、海運、そしてサービス業にいたるまで、あらゆる分野の企業に関わり、古希を迎えた1909（明治42）年に、ほとんどの企業を一斉にリタイアするが、生涯関係した企業の数、約500と言われている。

実業界での活動の中で、渋沢がとった姿勢の一つは、独占を嫌うということ、財閥を築かなかったということである。会社が設立され、経営が順調に進むを見定めると、多くの場合、自分の持ち株を売却し、その資金を次の新しい企業の支援に充てた。

会社によって自らの富の蓄積を目指すというのではなく、日本の近代化・産業化の推進に徹していたように思われる。

個別企業の設立・育成によって日本の実業界発展に尽力した渋沢であったが、一方で経済団体の組織化を図ったりもしている。その一つが、東京商工会議所の原型である東京商法会議所である。政府から年に1,000円の補助をうけて、1878（明治11）年に出来るに至っている。

商法会議所の設立を促した理由には、殖産興業からの必要性和同時に、幕末に諸外国と結んだ不平等条約の改正を促進するための商工業者の世論形成機関としての位置づけもあった。条約改正に当って、日本側が英国公使パークスに交渉して「世論が許さないから改正されたい」といった処、「日本には多数の集合協議する仕組がないではないか、個々銘々の違った申し出では世論ではない」と反駁された。そこで、条約改正に世論が必要であり、世論を作る場所を形式的に作ろうとし、商法会議所の創設となったのである。

政府は、民間商工業者の協力なくして産業の発達を為し得るものではなく、商工業者の代表団体を設置すべしという思いから、有力な商工業者を誘導し、その設立に至ったと言われる。ただ、商工業者自身もまた、政府並びに外国と対抗、協調しつつ、商工業の健全なる発達を期するためには、自らの世論を反映すべき代表機関の必要を痛感していた。このように商工業者自身の下からの要望も、商法会議所設立の一要因だったのである。

実業界を引退した渋沢は、その後も自ら最後の努力という意をもって、社会公共事業等の方面で、より一層奔走することになる。

一つは民間外交である。特にアメリカで日本移民の排斥運動が起こり、日米関係が悪化するなか、民間の立場から問題解決に取り組んだ。

1909（明治42）年、渋沢は、東京、横浜、京都、名古屋、大阪、神戸の商業会議所会頭はじめ51名からなる渡米実業団の団長として渡米し、3カ月かけて約60都市を回って地元の実業家、また大統領などに謁見し、関係改善にと尽力した。

また、日米人形交流の日本側の中心を担ったりもしている。

その他にも、ヨーロッパやアジアの人たちとの交流も盛んに行い、自邸を民間外交の拠点として多くの賓客を招き入れているのである。

渋沢が民間外交で意識したのは、関係改善を図るためだけではなく、日本という国を国際社会の中にしっかり位置づけたいということであった。

福祉についても、日本における医療、福祉の原点として位置づけられる東京養育院に関与し、亡くなるまで院長として職責を全うさせたのであった。今でいう養護老人ホームをはじめ児童養護施設や児童自立支援施設、虚弱児童等の転地療養施設など事業を拡大させた。また、そこを支えるための看護師や保育士を養成する機能を持たせている。この養育院を中心に、数多く

の福祉・医療に関する施設・機関に支援、協力をしている。

教育面では、特に当時、高等教育とは無縁なものとして片隅に追いやられていた商業教育と女子教育の重要性に着目し、商業実務や女子を対象とした民間の教育事業発展のために尽力した。現在、一橋大学、東京女学館、日本女子大学等が立派に受継がれている。

渋沢は、生涯関係した企業の数は先述の通り、約500あると言われるが、民間外交も入れると、社会事業に関わった数はそれを上回って600にもなる。このように、非常に多岐にわたる事績を残した渋沢は、1931(昭和6)年11月11日、満91歳で惜しまれながらこの世を去った。今日、その渋沢をして単なる実業家でない「日本の近代化のオーガナイザー」と称される所以を感じていただけたと思う。

3 幕臣として：渋沢栄一の渡欧体験

先に述べた通り、渋沢栄一は幕臣時代のほとんどを1867年のパリ万国博覧会に幕府使節団の庶務・経理係として参加しヨーロッパで過ごしたのである。渋沢の人生の一大転機であった。

急に決まったことでもあり、出発準備に追われる中や、渡航途中の船中にて西洋の生活習慣に触れ始めたのである。以前は攘夷論を主張していた渋沢だが、この時には、何でも諸外国の好い処を知り得たいという思いが生じてきており、積極的に吸収していった。記録から次のようなことが判明する。例えば、語学の練習である。早く外国の言語を覚え、外国の書物が読めるようにしたいと思っていた。船中にてフランス語の稽古をはじめ、文法書などの教授を受けたようだが、渋沢は、元来船には弱く、稽古も出来なかったもので、自然と怠り、結局、進歩せずに終わったようである。

次は食事である。朝7時頃、乗客が洗顔を済ませたころにお茶の時間があつたようで、お茶には必ず砂糖を入れ、あわせてパンやハムなどが出され、パンはバターをぬって食べている。

そして10時頃、朝食を食べる。陶器の皿に添えられているスプーン、フォーク、ナイフ等で食していた。菓子、蜜柑、葡萄、梨子、枇杷、その他数種がテーブル上に並べられているのを自由に取って食べたようである。また、葡萄酒に水を加えて飲ませたようでもあつた。魚、鳥、豚、牛、牝羊等の肉が煮たり、焼いたりして出され、パンを一食に2、3片好みに応じて適宜食べている。食後にカフェオレを飲んだようで、「すこぶる胸中を爽やかにする」と感じている。午後1時頃、またお茶を呑んでいる。「菓類、塩肉、漬物」が出たようで、たいていは朝と同じだが、ブイヨンスープも飲んだようである。パンはなく、熱帯の地に至った際には氷を水に入れて呑んだりもしている。午後5時もしくは6時頃、夕食が出された。朝食に比べ、豪華な内容となり、スープにはじまり、魚を焼いた料理のほか、各種の料理そしてデザートとして山海の菓物およびカステラの類、あるいは砂糖にてつくられた氷菓子、アイスクリームを食べたようである。そして午後8時から9時頃に、またお茶が出され、朝から夜までに食事2度にお茶が3度を常としたようである。長い船旅の中で、心が落ち着き、ゆったりとした気持ちとなる時間だったようだが、ただ、喫煙は禁じられていた。

食事およびお茶の際は鐘を鳴らしてその時を知らせてくれ、鳴鐘は2度で、最初の1回は旅客を揃わせるためで、2度目はテーブルに就かせるためであった。もし、食べられないとか疾病であれば、医者に診てもらい、症状に応じて薬と適した食べ物が与えられた。

横浜を出立して1ヵ月と10日が過ぎた1867年3月26日、渋沢を含む幕府使節一行は、スエズに着いた。ここからアレキサンドリアまでを陸路・鉄道での移動となったが、その時目の当りにしたのが、開削途中のスエズ運河の大工事であった。

西紅海と地中海とは、アラビアとアフリカ州の地先が交接するところで、わずかに150—160里（約585—624km）ほどの陸路が海路を閉ざしていた。そのため西洋の軍艦、商船などが東洋に來船するには、喜望峰を迂回しなければならなかった。その経費は莫大で、運送が極めて不便なので、1865年頃から、フランスの会社が、スエズから地中海までの堀割りを企画し、大規模な土木工事をおこし、ちょうどその工事が進行中だったのである。汽車の左方（はるか）先にはテントなどが多く張られ、モッコを運ぶ工事人らの行き交うのが見えたようである。竣工は3、4年後の予定だったが、完成した暁には東西洋間を直行する海路を開き、西洋人が東洋の息を通じ、商貨を運輸する便宜は昔日の幾倍になるやも知れないというものであった。渋沢は、すべて西洋人が事業をおこすのは、ただに一身一個のためにするのではなく、多くは全国全州の大益をはかるものであり、その規模の遠大で目標の広壮さを大いに感じいったようで、この時、公益のための会社事業のあり方を意識し、初めての汽車乗車体験によって、交通機関たる、海の船舶、陸の鉄道は絶対に必要で、日本へ帰国したら、ぜひやりたい事業だと思ふようになったようである。

渋沢を含む幕府使節一行がパリに到着した翌日の朝から、現地の外国事務大臣へ無事到着した旨を伝える書翰を認めるところからはじまり、滞留中の規則等を定め、衣服等の注文をし、随員のための借宅探し、博覧会に日本の産物を出品する手続き、事前の会議などで時間に追われた。

ただ、その合間をぬって、パリ市中各所を巡覧している。ブローニュの森、凱旋門、軽気球のアトラクション、パノラマ（戦争図）、動物園、花園、大砲器械の貯蔵所、ノートルダム寺院、「交易公事吟味所」「罪人裁断所」、銀行、株式取引所、上下水道、病院などを目に見ている。博覧会会場の場所を確認することも兼ねたりしたが、植物園、水族館を見学し、大変めずらしいと感じている。とても盛り上がりを見せた競馬場にも足を運んでいる。

また、皇帝ナポレオン1世の墓を訪ねている。セーヌ川沿いの博覧会会場のすぐ近くにあり、結構壮大なものであった。だれかれを問わず自由に観させていたようである。ただ、渋沢の目を引いたのは墳墓のかたわらに建つ数種の家であった。その家には、戦争で重傷をおって社会復帰出来なくなった人が寄宿していた。政府がこの土地を選んで、国に尽くした人たちに安い費用で治療させているように見えたようである。また、墳墓の前殿および四方の門に立ち門番などする人の多くは、戦争の時に手を負傷した人々で、機械を陳列操作するところを守衛しているのは、多く足を負傷した人ということまで見ていた。後に福祉事業でも大きな功績を残した渋沢の原点を垣間見たような気がするものであった。

実は、パリ到着前にも、ツーロンという地にても学校を視察していた。化学試験所で、種々の製薬法や新発明の顕微鏡を見たこと以上に関心を示したのは、一つは、いずれも清潔で、規則にそってよく整頓されている、生徒約500人が寄宿していた修学所や会食所、生徒部屋などの様子であった。そして他の一つは、その生徒の寄宿中の費用が、修学衣食その他いっさいの雑費を含めて、年に900フランほどで足るということであったが、その理由が、富裕の人たちが協力して、助成のための基金を設けているということであった。

この学校視察の経験は、後に寄宿舎、奨学金設置などの育英事業にあたった渋沢にとって、一つ意識させるきっかけとなったのかもしれない。

視察の際の渋沢には、今後の日本にとって必要なものという視点があっただけでなく、運営・維持の方法も注視し、今でいう株式会社の組織「合本組織」に強い関心を示している。

渋沢は、帰国して数カ月後には「合本組織」を具現化させたが、実践を通して覚えてきたも

のだからこそ、素早く形にできたのではないだろうか。

渋沢が実際に見た万博会場の様子はどのようなものだったか眺めてみよう。

会場は、セーヌ河畔の周囲約4kmもある元の練兵場で、1週間ほどかけないと見切れないという規模のものであった。その中心に楕円形の巨大な建物を建て、内部は、参加した国々にその陳列する物品の多少に応じて、区域の広狭を定められていた。フランスが、会場の半ばを占め、他国はその6分の1、16分の1と分けられ、日本の区域は128分の1であった。これを清国、シャム両国と三分することになっていたが、日本が多く出品したので、そのうちの半分以上を占めていた。

博覧会の入場料は1フランで、多くは切符を買っておいて見物する。1週間または2週間の通し切符もあり、割引価格となっていた。外国公使や参加国の貴族に随従する官員は無料であった。

出品物については、服飾やぜいたく品にも渋沢の目はいったが、人体解剖の模型（紙細工）、電気仕掛けで図画を模出する器械？等といった新発明・新製品の機械類に注目した感があった。自分には雲が視線を横切った程度にしか見ることが出来ないとはいつつも、アメリカから出品した耕作機械や紡織機械は、特に優秀であると推奨している。

各国で用いている金銀貨幣の見本にも注目し、各国の丸い貨幣の中で、日本だけが方形をしていることに疑問を持った。

展示場の外縁では、諸州の名産を売る茶店・酒店がならんでいた。その中で人気を博していたのが、日本の茶店であった。檜造りで、6畳敷きに土間をそえ、便所もあって、もっぱら清潔を旨としていた。土間では茶を煎じ、古味淋酒などとともに供していた。庭中の休憩所には腰掛けをおき、もっぱら人形を並べて観覧にそなえ、座敷には、かね、すみ、さと、という3人の女性が座って、その姿や服装を見せていた。その衣服・髪飾りが珍しいばかりでなく、東洋の婦人が西洋に渡ったのは初めてなので、西洋人はこれを仔細に見ようとして、縁先に立ちふさがり、眼鏡を使って熟視するほどであった。その衣服を借着し、ついにはこれを買いたいと申し出た者もあったという。渋沢自身は「物好きなこと、まことに驚くべき」と思っている。

外部も広大で、1日2日で見終わらないほどであった。地球上のあらゆる動植物を集め、博物学者の研究に供し、研究の素材とし、動植物の栽培・飼育の方法を發明させていたのある。

渋沢が見た万博とは、物品の優劣や工芸の精粗を比較するだけでなく、学芸上の諸分野について、世界の公論と最新の知識によって従来解決出来なかった疑問を解明し、あるいは新説を提示するために、学者や技術者はもちろん、各国の専門家によって、真髓を極めるものだったようである。

万博見学から10日ほど経った7月1日、ランジストリー宮殿にて博覧会の褒章授与式が行われ、徳川昭武も招待され、各国の国王、王子、后妃等とともに列席した。この式典において、ナポレオン3世は次のような内容の言葉を述べている。

「この1867年の博覧会は、一見きわめて物質的なもののように見えて、実は極めて哲学的な原理に関するもので、人心の一致、和平をたすけ、四海が一家のように、ともに太平の幸福を享受するための一端となるものであります。万国の人民がここに集まることによって、相互に敬愛することを知り、憎み合うことを忘れ、自国の繁栄は他国の繁栄を助けるという根本原則を理解し、全地球上のあらゆる自然や人工の品を悉くここで見るので、これを“ユニヴァーサル”と言ってもよいと思います。

人間のあらゆる知恵と技術を明らかにしましたが、特に、工業の利用に関して、今回ほど心をもちいたことはありません。労働者の教養、厚生、力をあわせて一つの仕事をするということについて特別に重点をおきました。これらの点から見れば、あらゆる面での文明開化がいつに

進んでいることがわかります。

人の知恵は無限に発達し、人の心は日に開き、都市と田舎の差はしだいに消え、人情はますます厚くなるでしょう。この国の盛大さと文明を多くの人に示すことができたことも、誇りに思うのです。

このようにしてもなお、この国の盛大さを見ず、この国の開化を卑しむことがあるならば、それは逆に自分の国を愛する気持ちがないものと思います。この国も最近まで国内も穏やかでなく、外国を侵しおびやかすこともありましたが、今はすでに平和で豊かで、かえって他国の開化を促し、文明を高めようと努力しているのです。この国にしばらくでも滞在した外国人は、わが国民が他の国民に対して好奇心が強いと理解するでしょう。

この博覧会が万民の開化のための一つの段階となることを、私はもっとも期待するのですが、幸いに神のたすけを得て、帝位を永久に保持し、国民を安寧にし、人心慈愛の源をひらき、道理正義の勝利を告げることができるようになりたいと思っています。」

渋沢は、このナポレオン3世の演説内容に感服したのだが、それ以上に驚いたのは、翌朝の新聞に演説内容が掲載されたことであった。情報を重視する栄一にとっては、多くの人々に、速やかに伝達できる新聞に甚く興味を示し、非常に重宝なものと感じたのであった。

その新聞に掲載された日本を紹介する記事に目がとまり、その評判が気になったようである。例えば、7月18日に入手した前日の新聞に掲載された博覧会の記事では、次のように触れられていた。

「全アジア中で、最もよく準備され、フランスに送られたみごとな産物は、日本のものでした。それは、小箱、鏡のついた銀や象牙細工の小家具、青銅器、磁器、玻璃器、日本でも珍しく、貴人以外は手に入れることができない卵殻という磁器、銅または木材で鞘をつくり、よく鍛えた刀を収めるもの、天然水晶で細工した玉、日本婦人の美しさを想像させる人形、その他すべてヨーロッパの好事家をうならせるものばかりでした。家具として使う蒔絵、漆器もありました。漆器は、木製の器に彫刻を施したように漆を盛りあげて描いたもので、とても高価なものです。漆は、漆の木の樹液で、3年ほどの樹皮に刀できざみを入れ、ゴムの木のように流れ出したものを採取して作るもので、顔料をまじえて各種の色を出し、これを銅板上で練って、金銀なども交えて描くようです。

日本人が最も好むのは、長寿のもののように、鶴、亀、松の木があります。また架空の動物を意匠として描くことも好きです。亀の尾に濃い毛をはやしてみたり、竜の頭に馬の胴に鹿の足がある怪獣などがそれです。日本で有名な富士山と帆かけ舟と、魚が水中にて元気に泳ぐ様子なども好んで描かれています。

また、煙管に珍しいものがありました。その管はきわめて奇妙な形を彫刻した木または牙製のもので、装飾されています。日本では、男子の持ち物として欠かすことのできないもののように、絹の紐でこれを衣服に帯びるようになっているのです。その管は蘆の管で、その雁首は小さく、青銅を使っています。わずかに火を保つに足るほどで、これを吸うには指先でタバコを豆粒大に丸め、管の先に詰めるので、一吸いで終わってしまいます。日本の喫煙者は、しばしば1日に100管吸う者がいるそうです。タバコは黄色で、トルコ産のものに似ていて、細糸のように刻み、その香は人に心地よい感じを与えます。上等品は薩摩、長崎で産しています。」

その他にも、日本人の感情や習俗、家屋について紹介されたり、万博期間中、劇場等で演じられた手品、独楽・軽業などの曲芸について、その良し悪しを、ヨーロッパ、フランスから見た目で評せられていた。

後に、世界の中に近代日本を知らしめたいという思いもあって民間外交に尽力した渋沢は、

この時に、日本を世界に正しく、しっかり伝えることの重要性を感じたかもしれない。

幕府使節団一行は、パリでの公式行事を一通り終えると、将軍・徳川慶喜の国書を各国元首に奉呈する目的で、条約締結国を訪問する「欧州巡歴」の旅に出かけた。

まず、1867年9月3日にパリを出発し、スイス、オランダ、ベルギーを訪問し、一度パリに戻った後、10月17日に再び出発し、イタリア、マルタ島（当時イギリス領）を訪問、今一度パリに戻り、今度は12月1日に出发し、イギリスを訪問するという旅程であった。

この巡歴の旅に随行した渋沢は、欧州各国の名所はもちろんのこと、政治、軍事、経済・産業など当時の欧州社会に触れることが出来たのである。

ここでは、ベルギー訪問時のエピソードを紹介したい。

1867年9月24日の夕方6時にベルギーの首都ブリュッセルに着いた一行は、9月26日に陸軍学校を視察し、当日が同地の大祭日ということで開催された花火の催しも見学している。

9月27日には、アンベルスという地の砲台を視察した。当地が國中第一の要地であることから、特に強固な守りがなされており、欧州をあげて攻めてきても、容易にこれを破ることは出来ないという程だったようである。

9月30日には、リージュという所で、銃砲を製造する機械を見、シラアンという所では、製鉄所を視察し、反射炉と溶鋳炉の2つの炉、鉄材精製の方法、鋼鉄の吹分け方、石炭採掘法、砲車および蒸気車、鉄道線路その他いろいろな機械の製造などを見ている。その後、10月1日には、マリトオワニエトという所で、鏡およびガラス器などを製造するところを見、3日に、チュウルンという所で行われた狩猟を見、5日には、陸軍の歩騎砲3兵の発火演習を見たりした。

そして、10月6日の夕方6時に、王宮に招待され、国王と同席の晩餐のもてなしがあった。国王は正面に、昭武はその右側の席につき、随員の一行および高官たちも相伴にあずかった。

この時、ベルギー国王のどこを見学したのかという質問に、昭武が製鉄所を見学したと答えたところ、「それは良い。製鉄所を見たならば、日本へ鉄をかうて行くようにせねばならぬ。総て国というものは鉄を沢山使う程その国は盛んになる、私の国では鉄が沢山出来、イギリスよりも廉価である」と言って、今で言うトップセールスが行われたのである。渋沢は、初めて謁見した14歳の少年に国王が鉄をかうと勧めた様子に、奇妙で、実に可笑しいと感じた。ただ、日本では考えられない自国を富ますために、国王自らが商売のことに口を出す様子に、自らが目指す官尊民卑が打ち破られた世を見、いたく感心したのであった。その感心の度合いが余程強かったようで、後年、栄一はこのエピソードについて、たびたび語っている。

「欧州巡歴」の旅をすべて終えてパリに戻った翌日より、将来の日本の良き指導者となることを期待されていた徳川昭武は、予定されていた留学生活に入った。乗馬の練習に始まり徹底した語学学習など翌日の予習も含めて朝から晩までとてもハードなカリキュラムを着実にこなしたようだが、随員たちも「留学生」となって、昭武と共に学んだ。また洋服を着用するようになっていた。

渋沢は、引き続き庶務・会計の仕事に忙しい日々を過ごしていたので、勉学に集中することは出来なかったが、職務遂行を通じて様々な実地見聞を積んでいくことが出来た。

渋沢が苦心したのは、諸費用を節約して、昭武の留学・滞在費用を捻出することであった。昭武が留学生活に入った頃には、日本からの送金が途絶えがちだったので、一層の経費節減が必要だったため、次の節約策を実践した。①昭武乗用の馬車3輛のうち2輛を売却する。②雑用係として雇用していたフランス人を解雇する。③それまで昭武と随員たちが別々にとっていた食事を、一緒に食卓につくようにする。④余剰金はフランスの銀行へ預金する。⑤フランスの鉄道債券と公債証書を購入して利殖する。また渋沢の提案で、昭武と随員一同の今後のために

毎月定額を積み立てし、積立金がたまると銀行へ預金したのであった。

しかし、年が明けた早々、現地の新聞報道、電信、日本からの御用状などにより王政復古のクーデター、鳥羽伏見の戦い、旧幕府軍の敗北、そして徳川慶喜の大坂城脱出と上野寛永寺での謹慎など、辛い情報が次々と飛び込んできたのである。昭武たちは、全貌が分からないために今後の進退をどのようにするべきかを決定できなかったところに届いた御用状、慶喜の手紙にて、昭武はそのまま留学を継続するように伝えられたが、新政府から昭武に帰国命令書が届き、また、水戸藩庁からの御用状で、昭武が水戸藩主に就任することが告げられ、帰国を迫られる事態となった。そのため長期留学は困難な状況となり、昭武は帰国を決断したのである。

渋沢は帰国の準備を急ぎ、フランス政府と様々な交渉を重ねたほか、帰国費用を調達するために奔走し、購入していた鉄道社債とフランス公債も売却した。また、経費の収支決算、家庭教師の解雇手続き、借りたアパートの解約、仏国商社への未払い金処理、万国博覧会出品物の売却処分など、様々な債務・事務処理を急いで済ませるほか、荷物の梱包、関係者への下賜品調べ、土産物の調達、乗船手続き、銀行で為替手形の受け取りなど、帰国準備や手続きに忙殺されたのであった。

マルセイユ港を出港した際に昭武に随行したのは渋沢ら9名で、華々しい横浜出港時とは違う、寂しい帰国の途となった。

渋沢が、この渡欧体験で、フリーリ・エラルを介して学んだナポレオン3世統治下（第二帝政期）の社会・経済システムは次のようなものであった。

- ① 社会の富の根源は生産にありとする産業（人）優先の社会
- ② 金・モノ・人の流通・循環するシステム（繁栄の基は「政治体制」でないことを実感）
- ③ 流通・循環を加速させる鉄道、船舶・港湾などを含むインフラ整備

インフラ整備には莫大な資金を必要とし、そのために、将来を見据えた産業投資型のベンチャー・キャピタルを重視し、政府の信用貸与で銀行を多く設立奨励、銀行は、小口の預金銀行でもあり、投資のための資金を民間から集めるものでもあるという実態の存在。さらに、銀行による融資だけでなく、株式や社債による直接金融も不可欠とし、有価証券の流通を促進させる株式（証券）取引所の整備（小口の投資を喚起）が図られるというものであった。

明治の代になり、渋沢の立場で「文明開化」を具現化させた姿に重なるものであるが、私個人的には、その大元となるのは、ナポレオン3世統治下の社会・経済システムが、渋沢の生まれ育った血洗島周辺での状況に似ていたことから、渋沢自身も現地でのシステムを自然な形で理解・吸収出来ていたのではないかという点を指摘しておきたい。

4 維新政府の一員として：渋沢栄一が関与した文明開化の基盤整備

渋沢栄一が民部省内に設けられた改正掛の掛長として近代日本をめざすべく制度改編にあたった一端を紹介したい。

当時、大隈重信、伊藤博文、井上馨といった政府の首脳たちは、欧米の先進国に肩を並べるべく近代化をめざしていたが、版籍奉還後の民部・大蔵省の体制は不十分なものでしかなかった。したがって、大隈、伊藤、井上等は政府内で地歩を固めるために、近代化政策を立案する有能な人材を必要としていた。欧米の制度・文物を、洋行・留学体験を経て知見を得た人物、留学の体験がなくても専門的知識を持つ人物である。大隈等は、藩閥などを一切無視し、このような人材を急ぎ集めようとしたのであった。その中の一人に渋沢が見出されたのである。

渋沢は、官員任命に対し辞意を訴えようとして大隈邸を訪ねたが、大隈の説得で翻意するや、

「今の省内の有様では、めざす諸般の改正は到底なし得られないと考える。省中は、長官も属吏もその日の用に追われて、何の考えもする間もなく一日を送って、夕方になれば、即退庁という様子である。真正に事務の改進黨を謀るには、第一にその組織を設けるのが必要で、これらの調査にも有為の人材を集めてその研究をせねばならないから、省中に一部局を設けて旧制を改革せんとすること、又は新たに施設せんとする方法、例規等は、すべてこの部局の調査を経て、その上時の宜しきに従ってこれを実施するという順序にせられたい」といった旨のことを述べ、「改正掛」新設を提議したと言われている。同様の考えを持っていた大隈も大いにこの説に同意し、民部省内に改正掛が設置されるにいたったのである。

実は、渋沢の「日記」によると、大隈への提議の前に、坂本政均（大蔵少丞兼民部少丞）とかなり談じ込んでいたり、岡本健三郎（民部権少丞兼大蔵権少丞）と「省中諸務釐正」「省中改正」に談じたりしている様子が窺える。

当面の諸務に追われる省内の事情を渋沢は坂本・岡本らから聞き、民部・大蔵省で専心活動するためには、まずそれを可能とする省内改革の要、改正掛の設置を大隈に承諾させることが必要と考えたと推測出来る。

渋沢は、改正掛設置を大隈から受け容れなければ辞めるが、承認が得られれば、大隈のもと、民部・大蔵省において大いに活動する決心を固めたと思われるのである。

こうして、新政府内部で、欧米先進国と肩を並べる「万国並立」のための近代化政策を積極的に推進する部局「改正掛」が誕生し、渋沢は掛長として尽力する。

その改正掛について概観してみたい。

まず、どのようなメンバーが集っていたかである。渋沢が租税司と兼務だったように、監督司から何人、駅通司から何人というように主要メンバーの多くは兼任で、異動もあったようである。設置された翌年には、より有為の人材を要するとして、掛長・渋沢は、大隈重信に申請して、静岡の藩士中から前島密、赤松則良、杉浦愛蔵、塩田三郎等の人々を続けて登用したが、その他にも例えば、洋書の読める人なども夫々推薦して、都合12・3人で組織されていた。

このように改正掛は、必ずしも固定した専任の者によって構成されているわけではなかったが、大隈、伊藤博文に直結した民部・大蔵全般の省務を対象とする調査・諮問機関として、広大な権限をもっていた。

実態を覗いてみると、会議には伊達宗城・大隈・伊藤等の卿輔も出席し、互に襟懐を開いて時事を討論したので、掛中は常に和合していたようである。また、血気盛んな人々が、色々研究したり、見聞したりした結果を、互いに論じあったので、時には喧嘩と間違えられる程だったとも言われている。

改正掛の性格は、「民部省改正掛条規」の諸規定に反映されていたが、一人民に対する法、政府内部の執務を規定する章程、府県の条例、民部・大蔵省内各司の規則など全般にわたって改正掛が立案するという、民部・大蔵省というよりは政府の「立案所」として位置づけられていた。

改正掛の活動はきわめて多方面にわたっていた。渋沢の回想によると、度量衡の統一、電信設置、鉄道敷設、郵便制度、貨幣制度、銀行制度の創設、官省官衙建設、職制・事務章程の制定、殖産興業の推進、暦法、身分制度の改正等々改正掛で取り扱った案件は約200件もあったということで、如何に精力的に任に当たっていたかがわかる。なかには、政府の基本政策についての建議、稟議等が含まれていた。従来、この種の建議は、政府指導者の一人が、個人的発意にもとづいて、事に応じて行なうものか、あるいは政府内外の個人が、特定の政府指導者に対して行なうものに限られていたが、改正掛による建議・稟議の提出は、新しい性質を帯びて

いた。民部・大蔵省という政府組織の一部局である改正掛が、内部で「公議」を尽して定めた意見を省議で承認し、それが民部・大蔵省の長（民部大輔兼大蔵大輔）によって廟議に提出されていた。したがって、従来一般の建議とは異なり、多くの場合、省務上の問題として太政官の裁可を求める形をとっていたのである。

改正掛は、1869（明治2）年11月に発足したが、民部・大蔵省の分離にともない、翌年7月、大蔵省に転属し、1871（明治4）年8月、廃藩置県とともに廃止された。わずか2年足らずの存続であったが、その密度濃い活動には感心させられる。

改正掛で取扱った具体的な案件について次の2例を見ていきたいと思う。最初は、近代的郵便制度の確立にむけての動きである。

本件を主導したのは、前島密であった。前島は、改正掛設置当初に、掛長・渋沢の要請によって1870（明治3）年1月に静岡藩士から改正掛のメンバーに加わった一人である。改正掛は、プロジェクトごとに、その道に精通した人材が集められていたが、前島は、当時、郵便・通信といった分野のエキスパートとしての採用でもあったようである。そして、同年5月には駅通権正に任ぜられる。

その前島が、郵便・通信事業確立のために、まず東海道試験郵便の計画を改正掛に諮り、以下のような内容の稟議書をまとめ太政官に提出した。

「手紙を安全かつ迅速に往復させて情報・消息を知ることにより、物資が広く行きわたる。これは国家の政治上でも重点事項であり、個人の交際上も大切なことである。今日までこれを商家（飛脚問屋）に委ねていたので、それほど遠くない所でも十数日もかかり、早急便で頼めば多額の賃金を要し、遠方、辺境の地などにはほとんど音信出来ず、たとえ出来たととしてもいつ届くか、時には紛失してしまい、つい相互の関係が絶えてしまう状態である。これではいけないので、官がまず試験的に東海道筋を京都まで36時間、大阪まで39時間の郵便法を開設し、公用、私用に拘わらず、安い料金で継達し、その手続きも簡単にするため書状賃銭切手を発行したいので御評決の上布告して頂きたい」

承認を受けて動きだしたこの試みが起点となって、近代的郵便制度は、1871（明治4）年から東京、京都、大阪の3都市と東海道筋で開始された。

前島は、自叙伝『鴻爪痕』の中で、駅通権正に就任時に「官たると民たるとを問はず、其音信を迅速に且つ安全に通達せしむることの切要なるは、猶人体に於ける血液運行の敏活自在を必要とするが如し」と思いを述べている。

実は、前島はさかのぼって長崎で勉学に励んでいた時に、アメリカ合衆国の駅通制度について書いてあった漢訳本『聯邦志略』を読み、アメリカ人宣教師・ウィリアムという人物が述べた「通信は国家においてちょうど人間の血液のようなもので、血液の循環によって健全を保つ。……政治・経済をはじめその他もろもろの物事に関して、血液である通信が滞りなく全国津々浦々に達し、今日のような活発にして富めるアメリカが出来たのである」といい、一枚の切手を貼った封筒を手にして、「この標章は配達料を支払った証拠で、これをポストに入れば間違いなく宛先へ届く」といった言葉を聞いたことからの動きであったと感じられる。

アメリカの模倣ではあったが、新たな創意も加えられ、そして今日の姿に至っているのである。次は、大蔵省職制・事務章程の改定についてである。

1871（明治4）年7月14日、廃藩置県の詔書が発せられると、政府はその旨を体して、機構改革に着手した。この月29日に太政官制を改め、正院、左院、右院をおくことにし、正院には太政大臣がいて天皇を補翼し、庶政を総判し、祭祀、外交、宣戦、講和立約の権、海陸軍のことを統治した。その下に納言がいて職掌大臣がつぎ、大臣欠席の時はそのことを代理する。そし

て参議は太政大臣に参与し官事を議判し、大臣・納言を補佐し庶政を賛成することを掌るよう
に職務を制定した。太政官にはその下に、枢密大史、同権大史、同少史、同権少史、大史、権
大史、少史、権少史を置き、常に出勤して、機密の文案を作成したり、位記、官記をつくり、
文書の記録を掌ったりすることにしたのである。

以上のほか、各省の職務担当等すべての職制と事務章程に明記し、政務遺漏なきことを期し
たのであった。

そもそもこれは、伊藤博文がアメリカにて調査してきた制度の一つであった。日本でもア
メリカの制度にならい布かなければならないということで、大隈重信、井上馨、そして渋沢に
ぜひ実行してもらいたいと何度も言ってきたと言われている。

井上が大阪の造幣寮勤務から東京に異動になった明治4年5月頃から始動した。伊藤がアメリ
カで調査してきたのは、国立銀行制度、国債法についてもあったが、これらの調整と同時並行
して官省の職務章程の改正に着手したのであった。大蔵大輔となった井上の指図で、改正掛長
の渋沢が特に中心となって調整にあたった。その年の盆ぐらいまでにぜひともまとめたとい
ことであったが、各部局の章程をすべて決めるので、この字が良い・悪いといったところから
始まる状態で、なかなか間に合わない状況だったが、当時、湯島にあった渋沢宅に改正掛の富
田冬三、杉浦讓等6人ばかりが、夜の2時・3時頃までの夜業を続け3日ばかり缶詰め状態で事に
あたった。案文を拵えては確認のため見てもらうということを繰り返し、大体これで宜しかろ
うとなり、やれやれという思いで発表に至ったようであった。

改正掛では、各官衙の造営についてもどのようなものにすべきかということで着手していた
ことを付記しておく。

このように近代国家を目指す精鋭達の努力は、一つ一つ確実に結実していったのである。

改正掛が存続した2年足らずの凝縮された時間の中で、非常に精力的に、近代国家形成の基
盤となる案件を網羅的に着手していったのである。この驚くべき渋沢のエネルギーと能力は、
政府内部でも認められ、強い信頼が得られるようになった。渋沢にとって明治政府での役人時
代は、その後の活動には欠かすことの出来ない知識、経験をもたらすと同時に、通常であれば
築けないような人脈を形成する結果をもたらしたのであった。

5 渋沢栄一にとっての文明開化はさらに続く

渋沢栄一の立場から「文明開化」をみたが、幕臣としての体験が大いに活かされ、明治政府
の一員として挑んでいったことが理解できたと思う。それは、あくまでも「文明開化」の基盤
整理にまい進したのが実態であった。

渋沢にとって「文明開化」となったのは、民間にて多くの事績を重ねていく中でのものであ
ったと思われる。生涯関係した企業の数が先述の通り、約500あると言われ、社会事業に関わ
った数が600にもなるという実態がそれを物語っている。

健全なる会社経営のための労使協調を重視した点、会社によって自らの富の蓄積を目指す
というのではなく、日本の近代化・産業化の推進に徹していた点、民間外交で意識した、国同士
の関係改善を図るためだけではなく、日本という国を国際社会の中にしっかり位置づけたいと
した点、近代化・産業化から生まれてきた貧富の差、日常生活からドロップアウトした人々に
熱い眼差しを向け、新しい国づくりを志す上で、社会福祉事業にも強い思いをもってあたた
か、教育面では、特に当時、高等教育とは無縁なものとして片隅に追いやられていた商業教育
と女子教育の重要性に着目し、商業実務や女子を対象とした民間の教育事業発展のために尽力

し、新しい国づくりのための人づくりも決して忘れなかった点である。

これらを一つ一つ形づくることによって、自らにとっての「文明開化」を「開花」させたのであった。

⑥ おわりに

渋沢栄一の行動から見出せる信念というのは、政治に対する経済の優位であったと思われる。「公益」の視点に基づく民間の活動が、政府「官」の活動を補完するだけでなく、むしろ先導すべきものである。それによって、日本の発展、国際社会への貢献につなげることが渋沢にとっての最終的な「文明開化」の形だったのではないだろうか。

(いのうえ じゅん 渋沢史料館館長)